

ほほえみ 第79号



6月となりました。6月というと、雨の季節という印象もあるのですが、一年で最も日の長い夏至のある月でもあって、雨さえ降らなければ良い季節だと思います。北半球ではバラの季節でもあり、ガーデニングをされている方、特にバラ栽培を行っている方にとっては、最も、待ち遠しい時期ですね。この季節を迎えるために、剪定や誘引などの管理を行っていると言っても過言ではありません。今年は、どんな花が咲くでしょうか。

草野心平とカエル

6月、梅雨といえばカエルを思い出します。今回のニュースレターに入れたカットにもカエルが入っていますね。そして、カエルといえば・・・、草野心平です。カエルの詩人とも言われるくらいですから。

草野心平は、多作な詩人で、カエルに限らず、富士山をテーマにしたものも有名なのですが、なんといってもカエルの詩が思い浮かびます。オノマトペを使った詩が有名ですし、宮澤賢治を見出した人でもあります。しかし、個人的には、何といても、味わい深いのは次の詩です。

墓

日は暮れんとしてゐた。
文庫の庭の朴の木の根元の山ツツジのところを墓がもつそり歩いてゐた。
自分を見て墓は歩くのを止めた。
自分はいたづら気をおこし墓に小便をひつかけた。
(酒がはいつてゐたからそれはあつつぼくもあつたろう。)
一分、二分、三分、四分、五分。位。
眼は見開いたまま。
墓は動じない。
一ミリも動じない。
自分は敗けた。



この詩の味わいは、人それぞれでしょうし、自分自身でも年齢を経るにしたがって印象が変わってきていますが、他のカエルの詩と何か異なる風合い、ユーモラスだけで括れない深遠なものが根底に流れていると思います。夜にワンカップを飲んだ心平が、「カエルの面に小便」を実際に行動してみせるのですが、じっと動かないカエルの前に敗けてしまうのです。ここに、人間の憂鬱があるというか、人間存在の軽薄さがあるというか、何ともいえない読後感が生まれます。

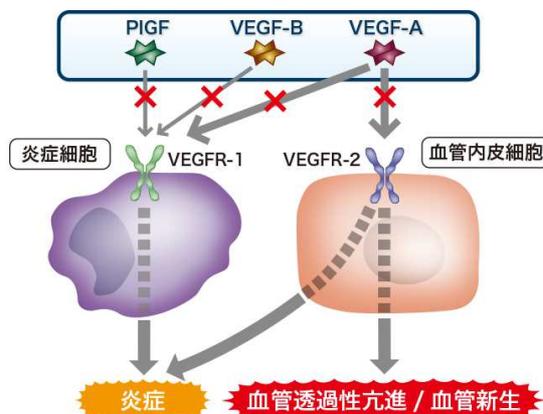
今、思うと、この詩は、意図せずに、存在論、時間論を語っているようにも思われます。草野心平は、存在のパンドラの箱を意図せずに開けてしまったのかと。不意に存在と対峙してしまい、時間意識も遠のき、存在が何かを語りかけてくれるのを待ってはみただけですが、存在というものは、語りかけてこない、じっとそこにいる。これぞ、純粹に哲学的な瞬間ですね。墓とは、要素の剥ぎ取られた存在、存在そのものの存在、ということになるのでしょうか。こんな詩を書ける人間は他にいません。

アフリベルセプト(ザルトラップ)の承認

大腸癌の治療薬である、アフリベルセプトが承認されました。この薬剤は、治癒切除不能な進行・再発の結腸・直腸癌に対しての適応となっています。

この薬剤は血管内皮細胞増殖因子(VEGF)の作用を阻害する、遺伝子組み換えの抗体製剤です。従来、ペバシズマブ、ラムシルマブという薬剤が開発され実用化されてきましたが、今回、アフリベルセプトが承認され、使用できる薬剤の幅が広がったこととなります。

実際には、流通のステップが必要ですが、ごく近い将来に使用できるようになるかと思われます。臨床試験では、オキサリプラチンを含む化学療法後の二次治療での成績があり、国内では、当面、二次治療で使用されていくものと思われる。



フェリシアの開花

今年、春先に我が家に来たつるバラです。中輪のピンクのバラですが、繊細な印象の樹形で、花を支える茎(ステム)も細くて花が咲くと重そうですね。

我が家では最も、早く開花しました。開花も進んできていますが、このバラの素晴らしい特性のひとつは香りでしょう。ハイブリッド・ムスクという系統のバラですが、正にバラらしい香り、ダマスク系の芳香でしょうか。香り方が大変に上品です。

玄関脇で咲いているのですが、毎日、玄関ドアを開けると、このバラの香りを楽しむことが日課となっています。



MEMO

6月のがん化学療法科の予定

6月6日	診療応援(平出先生)
6月13日	診療応援(工藤先生)
6月16日	新渡戸稲造記念 メディカル・カフェ
6月20日	診療応援(平出先生)
6月21日	夏至
6月27日	診療応援(工藤先生)



田の緑がもっとも美しい季節ですね